

棚田保全活動
情報発信事業
報告

10年歩むか5年走るか

泉谷棚田を核とした地域づくりへ
〜農業+αの生業づくり〜

泉谷地区棚田を守る会
事務局長 中川 稔徳



棚田の仲間と共に展示PRを行ったところでは。

平成11年に泉谷が日本棚田百選に選定されたことを受け、「泉谷地区棚田を守る会」は発足しました。

これまで、御祓自然浴ツアーや、農作業体験である棚田オーナー事業、しゃくなげによる景観整備事業などの活動をしてきました。

しかしながら、地域は高齢化し、棚田を未来へ継承するための後継者養成という課題解決に至っていません。そこで、3年前に、このまま同じことを10年続けて終わるか、可能性を信じ5年で潰えたとしても全力で事業を発展させるかを議論しました。

結論として、会は後者を選択しました。

移住につなげるため、これまでの棚田での交流を糧として、地域全体を活性化する事業を展開し、更に定住につなげるため、棚田を活用した農業+αの生業づくりを目指すことにしたのです。



棚田オーナー事業

まず会では、事業展開を図るために計画を立てました。その内容は次のようなものです。

- 1米の全国販売
- 2産品の開発・販売
- 3宿泊所運営
- 4体験商品開発
- 5農家レストラン
- 6移住者募集
- 7廃小学校の活用
- 8農家民泊の推進
- 9SNSを活用した情報発信
- 10全国組織との情報交換

この3年で進んでいない部分もありますが、現在は、なんとか会員拡大にもつながり、これまで交流をしてきた方々の支援も受けながら、地域が前進していることは間違いないと思っています。ちょうど泉谷をテーマにしたドキュメンタリー番組が、多くの賞を受賞したという幸運にも恵まれましたが、これまでに、棚田米の販売量は増え、宿泊所も整備・稼働、体験商品企画も進んでいます。平成29年には、情報発信のためのパンフレットも制作でき、御祓のお土産開発として、どぶろく御祓(泉・花)を開発し、満を持して東京の大きな展示会で全国の

御祓の交流事業

我々の交流事業は、飾らないことを第一に考えています。なるべく地域課題を隠さず、交流者と共有し、観光地というよりも関係地となることを目指したいと思っています。

どこまで走り続けられるかは分かりませんが、過疎地域は、マンパワーに限りがあり、人の代わりが居ない状況が常です。活動には、明日終焉を迎えるかもしれないという不安が付きまといまいます。しかし、時間は進み続け、我々は年をとっていきます。地域全体の皆で活動できるチャンスは、今後訪れないかもしれないかもしれません。我々は目線を上げて、今出来ることを全力でやって、前に進むしかないと思っています。



エコプロダクツ